



『母の家』(B.S.タパ監督)が公開された。その後ヒラ・シンは、政府の支援で『ヒジャ・アジャ・ボリ(昨日今日明日)』(1967)と『バリバータン』(1971)を作った。『アマ』からの8年間で“ヒラ・シンの年”とよばれるネパール映画の黎明期である。

1971年、官立のロイヤルネパール映画社が設立されて、ネパール初の映画スタジオと現像所が完成し、『マン・コ・バンディ(心の絆)』(プラカス・タパ監督、1973年)を皮切りに、『クマリ』(1977)、『シンドゥール』(1980)、『ジープン・レカ』(1982)などが作られた。民間による映画製作も活発になり、『カンチ』(1984)、『バスデブ』(1984)、『サンジャナ』(1985)など、今も多くの人が記憶するネパール映画ができた。ネパール映画の発達期である。

1990年の民主化にともない、1991年11月、映画法が改正されて、情報通信省の管轄下に映画開発委員会(FDB)が設置され、映画産業の振興・監督にあたることとなった。ダーズリン出身のトゥラシ・ギミレ監督は、『ラフレ』(1990)、『チノ』(1991)、『ダクシナ』(1993)などの優れたヒット作を生み出した。1995年には、ヤダブ・カレル監督の時代劇大作『プレム・ピンド』が公開された。1999年、フランス人のエリック・ヴァリが監督した『キャラバン』が米国アカデミー賞外国映画賞にノミネートされた。2000年には年間映画製作本数は55本に達した。2001年、トゥラシ・ギミレ監督の『ダルバン・チャヤ』が公開され、ネパール映画史上最大の収益をあげた。この頃までが、ネパール映画の黄金期だった。

ネパール映画の現状とこれからの可能性

その後、国内情勢の混乱により、同国の映画産業は急速に縮小したが、社会の安定化にともなって徐々に回復傾向にある。もっとも、現在、ネパールの映画館に掲げられた国産映画の看板を見るとどれもよく似ており、実際その多くはインド映画を真似ながら低予算で作られ、似通ったストーリーとダンスを組み合わせた恋愛ものかアクションものの繰り返しで、インテリ層のみならず、労働者層からも飽きられてきているようだ。黄金期には、映画館に入るのに3日並んだなどのエピソードにこと欠かないネパールの映画産業だが、昔日の賑わいはいまや失われたかに見える。

筆者は、『カタプタリ』公開に際し、情報通信省の上映許可を得るために、同省内で映画開発委員会(FDB)のための試写を行なったほか、ネパール映画協会、プロデューサー協会、監督協会、俳優協会、そして現在に至るも国内唯一の映画スタジオと現像所であるネパール映画開発会社(ロイヤルネパール映画社が1993年に民営化

されたもの)などを訪ねて、多くの映画人と接することができた。関係者の誰もが、インド映画の焼き直しが横行し、製作費の低予算化による質の低下と、そのための観客離れという悪循環に陥っているネパール映画の現状に、大きな問題意識を抱いていた。ケーブルテレビやDVD、インターネットの普及に埋没することなく、ネパール映画の新しいアイデンティティをいかに確立していけるかが課題だと、彼らは口をそろえた。

しかし、このような問題に自覚的であるということは、同国の今後の経済発展や教育水準の向上によっては、映画表現の成長余力が十分に高いものであると感じさせられるところでもある。ナビン・スッパ監督の率いる「少数民族映画アーカイブ(IFA)」の活動には、大きな可能性を感じたし、デジタルシネマへの挑戦も一部で始まっている。

筆者が『カタプタリ』の製作と公開を通じて理解できたことは、情報化とグローバル化によってネパールの映画観客の目は肥えてきており、しかも人々の本来的な気質なのか、映像表現の暗喩や隠喩についての感受性が豊かで、審美眼が鋭いということである。映像表現を志そうとする若者たちはデジタル機器を駆使する能力も高く、パワーが感じられる。遠くない将来、ネパール映画が世界をあっと言わせるような傑作を生み出すことを筆者は信じている。

(いとうとしあき 東京情報大学准教授・映像メディア論)

(注) 2007年11月号で本作のロケ地を“ゴラ”村と記したのは“バタセララ”の誤りでした。お詫びして訂正します。

映画『カタプタリ～風の村の伝説』上映会

(ともに「ネパール映画の歴史と現状」講演あり)

1. in松山(もっと知りたいネパール10周年上映会)

2008年7月12日(土)13:00～於・松山東雲短大
主催・CCWA愛媛の会 電話089-931-0445
E-mail fwiz9864@mb.infoweb.ne.jp

2. in千葉(西船橋)

2008年7月27日(日)12:30～/14:00～(予定)
於・葛飾公民館(JR西船橋駅下車徒歩10分)
主催・ハテマロ会 電話090-2320-7706(伊藤敏朗)
E-mail ito@rsch.tuis.ac.jp

○本作の上映と講演のご要望は、2の伊藤敏朗連絡先までお寄せ下さい。

『カタプタリ』ホームページは

<http://www.rsch.tuis.ac.jp/~ito/kathputali/>